

(トラック①)

(無機質な駆動音と共に、冷酷かつ妖艶な瞳を覗き込ませて)

(中・中)

ふふ、目覚めましたか…

正義のヒーロー、ハルシオン・スレイド。

(視線を下半身へ這わせ、あざ笑うように)

衣服を剥ぎ取られ、

情けない男性器まで晒している

あなたの姿…

機械光を放つ私の瞳に、

無様に映り込んでいますよ。

(一歩踏み出し、ヒールの音を響かせて)

(中・近)

私はこの世を征服する悪の組織、

ネフィリム機関の監視アンドロイド…

モデル・アークガーディアン、

ネクロトリア03 通称『ネクロ』…

そう呼ばれている

アンドロイド怪人です。

(冷たい指先で頬をなぞり、吐息を吹きかけて)

我々ネフィリム機関に逆らい続けた

正義の象徴であるヒーロー。

あなたがここ、

生殖強制監獄インキュベリアに收容され続けている限り…

私があなたのその正義の心、人体、生殖器に至るまで全てを矯正し、我々が目指す人類生殖資源化計画の礎になってもらいます。

(淡々と、しかし絶望を突きつけるように)

我々アンドロイドの台頭により、世界人口はすでに全盛期の3割程度に縮小されています

あとは、あなたのような人類の希望である、正義のヒーローの威厳を挫くだけ。

そうして人類は、我々アンドロイドの生殖資源として活用されることになるのです。

あなたのような強いヒーローは、その力と逞しい生命力で我々の軍勢を何度も退けてきました。

しかし、こうなってしまうては、もう逃げることは叶いませんね。

(嘲笑し、人工知能の優位性を語る)

我々も馬鹿ではありません。
人類を超越したAGIの演算能力により、あなたの計画は
とっくに見透かされていたのです。

ふふっ、あなたは・・・
先日捕えられた恋人の女ヒーローを救うために、
ノコノコとやってきたのでしょうか？

（低くドスを利かせて）

ふふ、浅はかですね。

隙があれば逃亡と救出を企てる…

随分甘く見られたものです。

私、アークガーディアンである

ネクロトリア03は、

あなたのことを…決して逃がしません。

それどころか、

優秀な種付け用、

生殖資源（せいしよくしげん）として

活用できるように、

その心を粉々に打ち砕いてやりますから…

ご覚悟ください。

（瞳を赤く発光させ、分析モードへ）

ふふ、その瞳に、

まだ反抗の光が灯る様子…

気に入りませんね。

それではまず、

ヒーローとしてのあなたを墮とすために、

プライドをへし折ることから始めましょうか。

（指先でなぞるようなイメージで）

ほら、あなたの肉体に

散りばめられたナノマシンが

自動的にデータを収集してくれているので、

すでにあなたの弱点、性感帯、

その全ては私の手中にあります。

（敏感な太ももの内側を冷たい金属指でなぞり）

このように、あなたの弱いところを…

ふふ…ピクリと、

身体が跳ねましたね。

太ももの敏感な部分を

アンドロイドの硬い金属に触れられて、

身体をビクつかせるなど…

人間というのは随分と簡単なつくりです。

（抵抗する様子を鼻で笑い）

ふふ、

そうですか、強がるのですね。

アンドロイドの私ごときで

貶められるわけがないと？

（強い口調）

ですが…

それは大きな間違いです。

ほら、あなたの性癖、弱いところ…

全てを私がデータとして、

もうインストール済みなのですよ。

（無防備な性器をガシツと鷲掴みにして）

このように、丸出しになっている性器を
アンドロイドの握力で…

“ぎゅーと”…握り潰してやるど…

ふふ、どうしましたか？
感じているのですか？

（グチ、グチ、と握り込みながら）

普通の男性は、

このように性器を握り潰されて
感じることはありませんよ。

ええ、解析結果に出ています。

あなたは正義の味方である前に…

（左・密着 ききやき）

ふふ、一匹の雌豚マゾ。

いじめられ、貶められ、
性器を暴力的に刺激されれば、
それだけで脳髓が痺れてしまう
根っからのマゾ性癖。

（中・中）

（嘲るように顔を近づけ）

ふふ、

隠さなくてよいですよ。

正義のヒーロー、特に男性は、
情けない性癖のマゾが多いのです。

ふふ、考えてもみてください。

正義の味方など何の見返りもなく、
敵から命を狙われ、痛めつけられ…
それでも立ち上がるなど、
ドMでなければできない所業です。

(勃起し始めたモノを弾き)

ほら、

その情けないマゾ反応。

金玉を強い握力で握り締められるたびに

マゾ勃起して…

ちんぽをいやらしく立てて…

情けないですね、

恥ずかしいですね。

敵であるアンドロイドの看守に

金玉を握られ、

それで勃起して、

果てようとするなど、

正気の沙汰とは思えません。

(軽蔑しきった視線で見下ろし)

ほら、ほら、ほら…ふふ。

しかし何とも

見窄らしいスペックですね。

これが正義の味方のイチモツとは。

いくらマゾ勃起しても、

皮被りのクズ肉が

ピコピコしているだけで…

面白くない。

男性器の平均サイズの

半分以下の欠陥品。

よくこれで、“正義のヒーロー”などと…自称できましたね。

(精神的ダメージを与えるように囁く)

あなたの彼女だったヒーロー戦士も、
嘆いていましたよ。

(やや右・近 復唱するように)

『ああ、もう少し大きさがあつたら
もっとセックス楽しめたのに…』

こんな小さいちんぽと

いくらおちんぽセックスしても、
おまんこ気持ちよくなれない』

(中・中)

と…常日頃から不満を漏らしていましたよ。

ふふ、なんですか？

なぜそんなことを知っているかなど…

どうしてでしょうね？

もしかして、あなたの彼女も

ここに収監された時に、

私に拷問を受けたのではないですか？

(左・密着 さささやき)

(ギリギリと握る力を強めて)

ほーらほら。

自分の恋人を貶めた

アンドロイド怪人の強い握力に握り潰され、
それでマゾ勃起をしている情けない変態は、
早く果てたらどうですか。

このように性器を握りつぶされて
マゾ射精など、

おおよそ普通の人間が
できることなどではありませんが、
マゾのあなたなら可能でしょう？

ほら、アンドロイドのちんぽ潰しで
イってみてくださいよ。

(中・近)

(反応を見て口元を歪め)

ふふ、なんですか？

機械なんかにちんぽ潰されても
射精なんてするわけがない、ですか。

ふふ…そうですね。

この身は機械でできていますが、
私も完全なメカニクボディではありません。

我々アンドロイドの中にも、
フレームレベルから

機械として組み上げられたものと、

生体ボディをリサイクルした
半生命体のアンドロイドの
2種類が存在します。

(自身の肌を撫で回しながら)

私は後者。女型のボディを使用し、
機械と生命体をハイブリッドに融合した
次世代型のアンドロイドです。

(復唱する感じで)

ふふ、なぜこのタイミングで
こんな情報を開示するか……ですか？

ふふ、同じ生命体を持ったボディとして、
あなたが情けなく哀れだからです。

子孫を残すための性器を

このように粗末に握り潰され、

それで雑魚クズ肉をピコピコして

射精しそうになっているあなたのことが…

滑稽で哀れだから。

（冷酷に告げる）

しっかり羞恥心を覚えられるように、
学習させてやっただけですよ。

（やや左・近）

ですが、まだまだこのような責めでも
不足しているようですね。

ただ射精をするだけでは、

あなたのプライドは

打ち砕くことができません。

（凶悪な形状の器具を取り出し）

（中・近）

ほら、私特製の調教ユニットを
装着して…やりますよ。

この“クパクパ”しているちんぼの射精孔に……

ほら…コネクトしますよ。

（尿道に異物が侵入する音）

ふふ、まるで杭を打ち付けられたように、
あなたのちんぼの射精孔は、
完全に閉塞されました。

これで私が許可コードを発行するまで、
体外に精子を排出することは叶いません。

（先端が塞がれた竿をいじり）

ほら…この状態だったら、

ちんぼ先のほうも

捌り付けてやりますから…

しっかりと情けないマゾ絶頂を
決めてみてください。

（中・近）

ほーら、

あなたのちんぼのこき癖、

私がしっかりデータ化していますよ。

あなたのちんぼはこうやって…

根元を人差し指と親指で摘み上げて
小さいクズ肉をゴシゴシ擦られると、
それで射精してしまうのですね。

（高速で扱き上げながら）

恋人に手コキをされて

もすぐに雑魚イキするような、

早漏惨めちんぼは、

アンドロイドの精微な握力のちんこぎで
早くお漏らししてください。

（やや左・密着）

ほら、漏らせ…

ほら、漏らせ…

ほら、漏らせ！

ふふっ、そのようにビクビクと、
体外に精子を排出しようとして…

ですが…

“不許可”です

(スイッチを入れる音)

ほーーら、

(射精)

どぴゅ♪

どぴゅ♪

発射…大逆流くく

うふふ…私の責め具、

リステイナス・スパイクの

スペックは如何ですか？

射精を検知したら、

その射出力の倍の速度で、

排出しようとした精子を

きんたま袋に逆流させ、

金玉にザーメンをすべて戻す…

射精阻害ユニットです。

どうですか？

射精できると思って

体外に排出しようとしたら、

逆流させられて、

金玉パンパンに膨張させられて…

とても辛いですよね？

(苦悶する様子を愉しんで)

ふふ…逆流した瞬間に

身体を仰け反らせて、

ちんぽ。ピクピクさせながら、
まな板の鯉のように踊り狂うあなたの姿…
とても滑稽で情けないですよ。

ほら、アンドロイドに
情けないマゾ射精を強要されて…
さらにイってください。

ほら、
今度は金玉を握り締めながら、
雑魚竿を、
ゴシゴシゴシゴシと、
オーバークロック気味の速度で
射精に導いてやります。

（「果てろ」連呼 無機質に8秒）
（抵抗する声を見殺し）

なんですか？
射精させないでほしいんですか？
却下します。

ほら、
おいきなさい。

ふふ、今度は倍の速度で
射精をひねり出したら……

（ビクンッ！と身体が跳ねる音）
リスティナス・スパイクで、
ザーメンを逆流させられたら、
金玉ビクビクして、
もう、脳がフリーズ寸前ですね。

（耳元で甘く残酷に）

（右・密着）

でも、これがいいのです。

逆流射精による、

全身を駆け巡るバグのような快感。

人として体外に精子を放出するという

最低限の行為すら許されない

屈辱と惨めさで、

マゾであるあなたは

さらに興奮を隠しきれなくなつて、

ちんぽを勃起させて、

さらに自分を追い込んでしまう。

（容赦なく手を動かし）

（やや右・近）

ほーら、

また強制射精させますよ。

連続絶頂でビクビク痙攣している

マゾ竿を、今度はㇿ本の指でこき上げながら…

ほーら、射精！

（再度の逆流、苦悶の息）

逆流前提の快感と、痛みと、

恥辱にまみれた雑魚射精。

ほーら、決めなさい。

あーあ、ふいふい…

今度は身体が耐えきれずに、

小刻みに痙攣して、

身体中から汗が排出されていますね。

（冷やかな目で見下ろし）

ふふ、これを繰り返されたら
どうなってしまうのでしょうかね。

正義のヒーローのあなたでも、
確実に精神崩壊しますよ。

そうですね、

あなたは重要な生殖資源ですから、
ここで壊すのは惜しみないです。

（命令口調で）
ですから…

たった一言、プライドを捨てて
私に申告しなさい。

（右・密着）
『アンドロイドの神様、
僕のちんぽからお漏らし許可を
お願いします』と。

人間ではない半生命体の
私に射精をねだり、
そして排出許可を取ってください。

ほら、早くしないと、
またマゾ射精させられて、
ザーメンを
金玉にフィードバックさせられて…

快感で、
今度こそ脳みそまで
ショートしてしまうかもしれませんよ。

ほら言え、ほら言え、正義のヒーロー。

男性として最低限の行いをするために、
アンドロイドに申告して、

射精許可をもらってください…ふふ。

（屈服の言葉を聞き届け）

あーあ、言ってしまいましたね。

プライドが碎ける音、

しっかり聴かせていただきました。

それでは、

必要なのは敗北と快感です。

私のリスティナス・スパイクを抜いて…

（ジュルツ、と粘液音と共に引き抜き）

ほら、射精しなさい。

最後は一切、

性器に刺激を与えてやりません。

自分の力のみで、

そのマゾ竿から射精を行ってください。

（強い口調で命令）

ほーら、出せ！

ああ……ビクビク、ビクビクと…

触れられてもない雑魚肉から、

容赦のない半狂乱のドロドロ射精。

金玉をヒクつかせながら、

力の限り大量射精。

ふふ、ここまで搾り取られるのは、
なかなか壮観なデータですね。

(まだ終わらないことを告げるように)

(中・密着 ささやき)

ほら、私の、

機械でできた瞳をよく見てください。

あなたのこと…

ここにいる間は責め続けて…

そして生殖資源として

しっかり活用できるように、

搾取し続けてやります。

(左・密着)

ですから、

私から逃げることはできませんからね。

…分かりましたか？

(トラック②)

(無機質な電子音が鳴り、バイザー越しの瞳が怪しく明滅する)

(右・近)

ほら、見えていますよ…？

あなたの体の中に、

私の精機ユニットで培養された、

私の分身である、

無数のナノマシンを打ち込まれて

血管、神経、細胞の隙間まで

這いずり回っているのが

良くわかります。

（指先を這わせ、肌の下を蠢くナノマシンと共振させるように）

ふふ、このナノマシンは、
あなたの身体の神経を
食い千切っては繋げ、
別のモノに作り替えていく…

そう、今のあなたは、
全身が「ちんぽ人間」。

指先、太もも、脇腹…どこを刺激されても、
亀頭を直接擦られるのと同等、
いえ、それ以上の快感が脳を焼き尽くす…。

そんな快感狂いの絶頂マゾ人形に
改造されてしまったのですよ。

（嘲笑いながら、電気鞭のスイッチを入れる音）

ほら、ふふ…

情けないですね、
恥ずかしいですね。

さきほどから私に殴られ、
鞭で皮膚を裂かれ、
高電圧を流され…

そして人として貶められ、蔑まれ…

（ビクビクと跳ねる肉体を観察し）

ふふ、それでも快感に勝てずに、
情けなくちんぽの先から、
ドロリとした透明な我慢汁を垂れ流して…

終わらない責め苦に耐えながら、
目は快楽で白目を剥いている。

あなたの恥ずかしくて情けない姿、
私の録画データに
永遠に刻み込まれていますよ。

（敏感になりすぎた乳首を、冷酷に摘み上げ）

ほら、次はこの

ガチガチに勃起したマゾ乳首を…
根元から捻り上げてやります。

より恥ずかしく、

雄として惨めになれるように、

身体はナノマシンのホルモン操作により、
丸みを帯び…ふいふい。

（柔らかくなった胸肉を捏ね回し）

乳房は少女のように丸みを帯びて、
Dカップ程度にまで成長。

少し突き出たピンク色の乳首と、
脂肪のついた乳房が、

より敗北感を醸し出してそそりますね。

ほら、膨らんだメス乳房を両方、
逆方向にギリギリと捻り上げ…

（悲鳴を上げる暇もなく、さらに強く）

ああ、本来は

痛くてたまらないはずなのに気持ちいい…

ナノマシンで変えられた全身の体質が、
恨めしいですね。

責められれば責められるほど、
男性器を直接扱かれる以上の快感が
身体中を駆け巡り、

あなたの情けないマゾ顔が、
私のこの瞳のレンズに
しっかり反射していますよ。

(焦らすように、勃起したモノの周りの空気を撫で)

ほら、ほら、ほら！ふふっ。

こんな痛みだけでちんぽをマゾ勃起させて、
射精寸前に追い込まれる。

しかし…

いくことはできません。

いくらちんぽをピクピクさせて、

先端から汁を漏らして射精をねだっても…

肝心の男性器、

あなた自身の竿は…

一切触ってもらったことも、

刺激を与えられることもなく、

いつまでもエラー状態のまま、

快感の淵を彷徨わされ続け…

もうフリーズ寸前…

頭がどうにかなってしまいそうですね？

ほら、

鋼鉄の拳を握り上げ…

その無防備な腹に…

(中・中)

(ドスツ、ドスツ、と重い打撃音)

ほら、ほら、ほら、

ご褒美をくれてやっていますよ！

腹を何度も撃ち抜かれ、

鉄の拳で内臓を突き上げられ…！

本当は嘔吐するほど苦しいはずなのに、
全身ちんぼ人間となったあなたは、
快感しか感じません。

(容赦なく拳をめり込ませ)

それでも…

ほら、ほら、ほら！

いくら快感で

脳髓と身体を支配されようとも、
射精は許されない。

あなたのその粗末な雑魚ちんぼ、
物理的な刺激は…一切与えてやっていませんからね？

(右・近)

(冷徹な論理で突き放す)

ふい、

もう分かるでしょう？

あなたはそのまま

私にサンドバッグのように弄ばれ、
性器を触っていない状態で射精ができる、
ただの「マゾ人形」に成り下がるんです。

（侮蔑の色を濃くして）

痛みと屈辱で、

一切男性器を刺激されていない状態で、
びゅーびゅーびゅーびゅーと

恥ずかしいマゾお漏らしを
私に晒してしまうのですよ。

ええ…

情けないですね…

哀れですね…

人間……やめたほうがいいですよ？

（低い声で、人としての尊厳を否定する）

いくらマゾでも、変態でも、

痛みが気持ちよくても、

一切触ることなく男性器から
マゾ射精など…

人としてあつてはならない欠陥品です。

（宣言するように）

でも、

あなたはそれを実行して、
すべての、人としての、

いえ、男性としてのプライドを
放棄していただきます。

もちろん、

ただの射精などでは、許しませんよ？

まるでホースから溢れ出る、

虹のような、勢いのある潮吹き射精以外は
認められません。

(中・近)

(拳にエネルギーを充填する駆動音)

ほら、内臓をグチャグチャにするほどの
強い一撃を……

ほらっ！

ハラの奥まで届く攻撃を

ほら、

叩き込んでやってますよ。

ほら、ほら、ほら、ほら！

(左・密着 ききやき)

(興奮を隠さず、一方的に殴り続け)

あなたは昔から、

こうやって攻められるのが好きですよね？

叩かれ、いたぶられ、

そして生存本能の極限まで追い込まれると、

脳のリミッターが外れて、

しっかり気持ちよくなれる

変態なんですよんね？

(中・近)

(意味深に)

ふふ、昔のこと？

どうして“分かるの”かって？

さあ…何でしょうね…

ほら、マゾはマゾらしく、理由など考えず、
快感のみで頭を、

いっぱいにしていればいいんです！

（打撃のテンポを上げ）

こうやって攻められ、

蔑まれ、

そして暴力的な快感に身を任せ、

オスとしてのプライドを全部放棄して、

その雑魚肉から

無様に射精をすればいいんです。

ほら、

ほら！

ほら！

ほら！

もらせ、

もらせ、

射精しろ！

ほくら！

（致命的な一撃の構え）

ふふ…

もう内臓がペースト状になるほどの

強い力で叩きつけられ、

あと一歩というところですね？

（やや左・近）

それではほら…

耳元で言ってあげますよ。

次の一撃で、あなたの身体、

グチャグチャにぶっ壊してあげます。

（キーン…と金属が唸る音）

(左・密着)

ほら、この金属製の拳で、

下からアッパーを叩き込んで、

内臓ごと全部破壊するような勢いで…

身体を

スクラップにしてあげますから、

その破壊力で、ほら、イキなさい！

(カウントダウン)

3、2、1……ほらー！

腹パン・ナックルで、果てろ！

いけえ！

(ドゴオオオオンー！！という破碎音)

(直後、ビュルルルッ！と激しい水音)

あーあ、

何ですかこれは…

身体をグチャグチャにされるほどの勢いで…

殴りつけられるという衝撃だけで…

ちんぽから、

びゅびゅびゅっ…と恥ずかしい潮吹き射精。

ちんぽから止まることがない

恥ずかしい体液を、

ビュルビュルとポンプのように放出して。

(飛び散った体液を指で拭い)

ふふ…まさか痛みを得る快感だけで

射精をしてしまうなど、

本当に救いようのない、どうしようもない欠陥品のマゾですね。

(やや左・近)

ふふ…

でもいいですよ。

あなたはこれで人としてのプライドを、
完全に捨てることができました。

男としては……

もう完全に終わっています。

(ガクガクと痙攣する体を踏みつけ)

(中・近)

だから、もつともつと、

私たちアンドロイドの

生殖資源として活用できるように、

まだ、まだ…

攻め続けてやりますから…

どうか…

壊れないでくださいね？

(トラック③)

(無機質な床に膝をつかせ、臀部を高く突き出させて)

(中・中)

ほら、屈辱的で…

実にいい格好ですね。

四つん這いにさせられ、

ケツを高く上げさせられ…

あなたの恥ずかしい穴が
照明に晒されて丸見えです。ふふ…

(金属音を鳴らし、股間の拘束具を爪で弾く)

しかも、ちんぽは…

ふふ…この通り、

小さい状態で

冷たい金属製のケージに

完全収納され…

オスとしての機能…

“勃起”をすることすら
物理的に許されない。

(あざ笑うように)

快感でマゾ勃起をしてしまうと、
拘束具の内側に仕込まれた
棘状の突起物が、
敏感な勃起ちんぽに突き刺さって…

痛みでちんぽフリフリして…
とても情けない。

(冷たく言い放つ)

ですが安心してください。
今日は“これ”の順番は…
一切ありませんから。

今日は…(ん)…
あなたがケツを上げ、
ケツ毛を私に晒し…
ヒクヒクと開閉する
汚いマゾアスタリスクをしっかりと舐けて、

快感専用のメスアナに
変えてやりますから。

(臀部の肉を揉みしだき)

私のナノマシンで、
身体中の組織を作り替えられ、
身体は丸みを帯び、

すでに半分以上メス化が進んだ

あなたのケツ穴…
私にしっかりと馴染ませてください。

もう

男としての、

あなたは終わり。

入れるための竿ではなく、
受け入れるための穴として、
私にしっかり開発調教されてください。

(抵抗する背中を上から押さえつけ)

ほら、

いくら抵抗しても無駄です。

データ解析の通り、
あなたはマゾなんですから、
こんな恥ずかしいことも…ほら！

金属製の私の手のひらで、
ビチンと尻の穴を叩いてやれば…

（反応を見て嗜虐的に笑う）

あーあ…

身体中、

マゾ快感が電流のように走ってきて…

興奮回路が焼き切れているのが

分かります…ふふ。

情けないちんぽ、

今の衝撃で一発勃起して

興奮してしまっているけど、

拘束具の中で

ちんぽが棘に食い込み、

痛みと快感で身体中を震わせて、

情けないですね。

（お尻の動きを目で追いながら）

ほーら、

あなたが檻の中で

恥ずかしいちんぽを

フリフリしている姿…

私の視覚センサーで

しっかり検知しています。

（ビンタ）

ほーら、

右、左、右、左！

強いアンドロイドのケツビンタで、

どんどんどんどん

身体中破壊されようとしているのに…

叩かれるたびに喘ぎ声を上げて…
とても恥ずかしいメスです。

(グロテスクな形状の玩具を起動させ)

こんなメスには、

ケツ穴の快感を

しっかり染み込ませて、

オスマゾとしての…喜びを与えてあげます。

ほら、私のお気に入りの

「ドミナス・スパイラル」。

私自身の廃棄パーツをベースに作られた、

ケツ穴…腭専用の

いやらしい極太ドリルパイプです。

(回転する先端を肛門に押し当て)

今からこのあなたのケツ穴に、

太いものをくれてやりますよ？

何ですか？

ケツ穴に当てがわれただけで…

(復唱する感じで)

「ダメ、そんな太いの入らない。

お尻の穴、そんな太いの入れられたら
壊れちゃう」と、

メスのような恥ずかしい嬌声で、

ケツ穴の命乞いをして…

情けないですね。

（無理やりねじ込み始める）

ですが…

私は分かっています。

あなたのケツ穴に、

私のこのドミナス・スパイラルが

すんなりと入っていくことは、

すでにシミュレーション済みなのです。

（根元まで沈め、中をかき回す）

ほら、

私の身体を作っていたものと

同じ材質のものが、

あなたの恥ずかしいオスケツ穴処女を

ブチブチと…ちらしながら…

直腸の奥まで

どんどん…挿入されていきますよ。

何ですか？

入らないと言ったくせに、

簡単に全部…飲み込んで…

浅ましいですね。

（ピストン運動を開始する）

ここをほーら、

こういうふうな、

少し出し入れしてやるだけで……

あらあら、

ケツ穴をズボつけられただけで、

恥ずかしいマゾちゃんぽを

フリフリ、フリフリ、フリフリ、

（嘲笑いながら速度を上げ）

勃起しようにも…
痛くてできない…

情けないクズ肉ちんぽを
フリフリ、フリフリして。

ケツ穴の快感と、
ちんぽの気持ちよさがリンクして、
哀れなマゾダンス…
恥ずかしいですね。

（冷徹に事実を突きつける）

でも、

いくら興奮しても無駄です。

あなたのちんぽは、
勃起を完全否定された…

永久にプライドを
取り戻すことができない、
ついているだけのクズ肉です。

（激しく腰を振らせる）

今日ここ“ケツアナ”で
イけるまでしっかり続けますから、
しっかり壊れるまで、
出るまで、果てなさい。

ほら、
ケツ穴、ズボズボ、ズボズボと、
どんどん、どんどん…
開かれていますよ。

（内壁を削るような音と共に）

太いものでケツ穴を蹂躪されて、
徐々に広げられて…

もう後戻りができないほど…
ガバガバに拡張され…

雄のくせに穴を

掘られて快感を得る変態

マゾ性癖をどんどん

インストールされていくんです。

（洗脳するように）

ほら、

あなたは…

もう…メスです。

こうやってアンドロイドに……

無機物でケツ穴を掘られて、

それでオホオホ言うような

“変態マゾメス”なんです。

（家畜扱いして）

ほら、

もう人として、男性として、

あなたに価値はありません。

ただの生殖資源として、

私たちに飼われるしかないんです。

ほら、

ブヒブヒと生産家畜のように、

情けない豚声を上げてください。

(反響する喘ぎ声を聞いて)

ケツ穴をほじられるたびに、
恥ずかしい豚声が、
牢獄全体に轟いていますよ。

ほら、

これがヒーローの成れの果て。

恋人を救うために
来たカッコいい男の、
情けない末路です。

(絶頂へ追い込む)

ケツ穴を弄られ、
勃起ちんぽを否定され、

それで今、
メス絶頂しようとしている
恥ずかしい男の終着点。

(許可を与える)

ほら、

いいですよ。

ちんぽの勃起、
および射精は
許可できませんが、
ケツ穴でイクことは許可します。

ほら、ケツ穴だけで
イってみてください。
私の太いもので、全身に快感をセットして、
イキ尽くしてください。

（激しいピストンで追い詰める）

ほら、

イけ！ ほら、イけ！

男のくせに、

ケツ穴ズボられて、

それでメスイキしない。

ほら、イけッ！

（ビクンッ、ビクンッという痙攣）

ああ……

ビクビクと、身体中痙攣して、

メスイキの気持ちよさを

自ら得てしまいましたね…

恥ずかしくて最低です。

（左・密着 ききやき）

ほら、彼女もこう言っていますよ。

『こんな情けないメスに

抱かれに来たなんて、

本当に恥ずかしくて最低』と。

（中・近）

（冷たく見下ろし）

ふふ…なんででしょうね？

どこからそんな恋人の声が

聞こえてきたかわかりませんが、

あなたのこと、

本当に軽蔑していることだけは、間違いないと思いますよ。

(完全に堕ちた姿を確認し)

ふふ、そうですか…

堕ちましたか…

抱いてほしいなど、

自ら男性であること、

いえ…

人間であることを放棄しましたか。

もう勃起すらできなくなった

マゾちゃんぽをひきつかせ、

ケツ穴をヒクヒクさせながら、

アンドロイドに

生殖行為をねだる…

生産性のない、

途方もない無駄な作業。

(呆れたように)

ですが、

あなたはそれがよいのですよね。

ほら、完全に終わりです…

あなたはもう…

人として、男性として、

二度と立ち直ることはできません。

情けないそのケツ穴を、

アンドロイドのぶつともので

ぶち抜かれて、

オホオホ叫ぶことしかできない、

情けない家畜のオス豚に

堕ちたのですよ。

(左・密着 ささやき)

(邪悪な笑みを浮かべ)

ですが…

いいでしょう

アンドロイド怪人である私、

ネクロトリアOSが…

お相手しましょう。

あなたのすべてを…

破壊し尽くしてあげます。

(トラック④)

(重厚な機械音が低く唸り、無慈悲な物体が姿を現す)

(中・近)

ほら、刮目しなさい。

これが私の、

お気に入りの最上位調教ユニット、

「アーク・ドミネーター」。

(太く、凶悪な張りを持った先端を、頬に押し当てて)

男性が、ケツ穴で、最も効率的に…かつ

強制的に快感を得るために…

膨大なデータ収集と、

非人道的な試行錯誤を重ねて

開発された最高峰のペニバンです。

（冷たく、しかし熱っぽく語る）

しかも…

先ほどの身体測定で得た

あなたの直腸データを元に、

あなたの個体サイズに合わせて、

ミクロン単位でカスタムしている…

あなた専用の…

最高の処刑器具です。

（耳元で囁き、恐怖を煽る）

（左・密着）

これをケツ穴にぶち込まれたら、

どんな屈強なオスでも…

脳髓を直接レイプされるような

快感に支配され、

その地獄のような心地よきから

逃れることはできません。

特に、あなたのような…

痛みと屈辱を餌にする、

情けない変態マゾにはね？

（背後へ回り込み、腰をロックオンする）

（中・中）

ほら、ケツを高く上げ、

恐怖と期待で

ヒクヒクとひきつかせている…

その恥ずかしい、開発済みのオス穴に、
私の機械ちゃんぽをくれてやります。

しっかりと、

あなたが気持ちよく、

脳が焼き切れるほどの

マゾ絶頂を迎えられるように…

腰をひくつかせ、

オスのいちばん弱いスポットを、

執拗に責め続けますから。

（警告音のような低い声で）

せいぜい、イキ狂って、

脳みそがショートしないように

気をつけてくださいね？

（ガシッ、と万力のような力で腰骨を掴み）

ほら、腰を…

しっかりと両手でロックしました。

いくら私が激しく腰を振っても、

もう…

逃げられないようになっていきますよ。

アンドロイドの

モーター駆動による高速な腰使いで、

ケツ穴を

物理的にぶっ壊されても…

決して、

逃げることはできません。

（先端を濡れた入り口にあてがう）

ほら、それではまず……

挿入開始。

(ヌプツ…ズ…ズブズブツ…!!)

(入り込む音と共に、嘲笑を漏らす)

ふふ……なんですか？

抵抗もなく…

こんなに太いのが、

すんなり入ってしまいましたね？

しかも、

根元まで沈めた瞬間に…

「ああっ！」という、恥ずかしい絶頂声。

ただ入れただけで

前立腺が震えて…

絶頂を迎えるなど…

男として、いえ、生物として、

恥ずかしいですね。

(ピストン運動を開始する。低速から徐々に重く)

(中・近)

ほら、

パン、パン、グチュ、グチュッ！

強い腰使いで叩きつけられ、

ケツ穴の奥深くまで…ズボズボ突かれ…

あなたの情けないオス穴を

完全に支配していますよ。

(速度を上げ、激しい粘着音を響かせる)

こんな太い無機物で出し入れされて、

マゾ絶頂を繰り返し、

本来の役割である勃起をすることも忘れ、

早漏ちんぽから

マゾお漏らしを何度も繰り返す……。完全にメスですね、あなたは。

（精神攻撃を加える）

ほら…

これが欲しかったのでしょうか？

正義の味方が、

悪の組織いアンドロイドにケツを犯され、蔑まれ…

自分はメスとして

恥ずかしい絶頂声を上げながら、何度もイキ狂いたったのでしょうか？

（激しく打ち付けながら、罵倒を浴びせる）

（やや右・近）

ほら…

あなたが心の底で望んでいた言葉、くれてやりますよ。

（右・密着）

この変態。最低男。

ケツ穴だけでイける、

脳みそぶっ壊れのバカマゾ。

恋人を助けに潜り込んできたくせに、自分がしつけられ、

ヒーローの役目を忘れ…

そして敵の快感に堕ちた日々を送る、情けないゴミ男。

(優しく、残酷な声色に変えて)

あなたにはもう、

何もなせません…

あなたにはもう、

誰も期待しません…

世界で私だけが…

あなたのこのありさまを

理解してあげられます。

あなたが…

どんなにぶっ壊れた変態マゾでも、

私だけがすべてを受け入れて、

管理してあげているんですから。

(再び激しく、トドメを刺すように)

ですから…

ほら…堕ちなさい。

もっと、もっと、深淵まで、

私の太くて大きなモノに身を任せ、

汚らしい快感に浸り、

そして穴として、しっかり果てなさい。

(中・近)

ほら、

ズボツ、ズボツ、ズボツ、ズボツ！

ほら、

システム制御された完璧なリズムで、
腰を動かされていますよ！

（絶頂へのラストスパート）

オスのくせに太いものケツ穴に…
入れられて、

オホオホ言いながら……

ほら、イキ狂いたいんでしょう！？

あなたの快楽は、

私が全部操作してあげますから、
いくらでもイっていいですよ？

この生殖資源は、

私が一滴残らず、

すべて奪い尽くしますから！

（最高速で叩き込む）

ほらいけ、

ほらいけ、ほらいけ！

オスとしての射精じゃない、

ケツ穴をズボ突かれ、

“メス”として…

しっかりイキ果てろ！

全部壊してあげるから、

しっかり果てなさい！

ほらいけ、イけ、壊れてイけ！

（ドブンッ！という破裂音のような射精）

（激しい喘ぎと痙攣が収まるのを待つて）

あーあ……いっ、

ドロドロ、ドロドロと、

恥ずかしいマゾ射精。

ケツ穴でバコ突かれ…

そしてちんぽからは、

制御不能な恥ずかしい漏らし方。

とても情けなくて、滑稽で…

非常に美しいデータが取れました。

（冷めた声で、しかし独占欲を滲ませて）

でも、

これがよいのでしょうか？

あなたのこと、この世界で、

私だけが理解してあげてます。

あなたの、

人としていちばん汚い部分、

私のデータベースで、

すべて管理されています。

（左・密着 きききききき）

ですから、

もう私から、

永久に逃げられることはできませんから…

（粘つく指で、果てたイチモツを弄り）

しっかりと、

この地獄に堕ちていいのですよ？

ふふふふ……

(トラック⑤)

(中・中)

(冷ややかな視線で、痙攣する肉体を見下ろし)

ふむ、チェックメイト…

もう完全に仕上がりましたね。

私のアーク・ドミネーターで

直腸を蹂躪され、

わずか一分半でメス絶頂。

その後は、ペニクリ化して、

勃起機能すら喪失した早漏ちんぽから

連続の回はマゾイキする…

快感でバグった改造人間…

我々アンドロイドが求めていた、

究極の生体パーツの完成です。

(満足げに頷き、股間へ手を伸ばす)

生殖資源のマゾ家畜として、

これ以上ないくらい

完璧なスペックに仕上がりました。

ですが…

ここでトドメの一撃を与え、

すべてを終わりにしてあげます。

(無機質な装甲を解除し、生温かい部分を露出させる)

ほら、いつものように

ペニバンで貫き犯す事は、致しません

この勃起もできなくなった、
ふにゃふにゃのクリちんぽ……

ほら、

私の生体生殖ユニット…

ふふっ、人間で言う

「おまんこ」と言われる器官です。

ここに擦り付けて、

私の培養粘液を染み込ませながら…

(中・近)

マゾちんぽに、

ぬらり、ぬらりと…

こすりつけ…

スマタで責めて、やりましょう…

ほら〜

短くて、貧相なくず肉が…

ズリ付けられて…いますね…

ほーら

ズリズリ、ズリズリ、ズリズリ…

(粘着質な水音を立てて絡ませ)

なんですか？

これは！

いくら濡れた秘部に擦り付けても、
ピクリともしないマゾちんぽ。

ケツ穴でならイけるくせに、
本物の女の器官に擦り付けられても
勃起すらできない。

男として終わっている…
情けないクズちんぽ…

(耳元で囁き、絶望を植え付ける)

(左・密着)

ここを使うことなど、
これからの人生二度とないと
思っていましたね？

ですが、今日はしっかり、
ここで抱いてあげますから、
魂が終わるまで、絶対許してあげませんよ。

(妖しく光る瞳で見つめ)

マゾというのはもう、
あなたの中で初期化できない
絶対的な快楽性癖。

攻められれば…
堕とされれば…

それで脳が焼けるような
快感を得られてしまう
変態なんですから。

ほら、「おまんこ」の入り口で…
ちんぽ磨き…
ごしごしごし、
ふふ…半勃起程度でしょうか…

(意地悪く笑い)

ですが…いいでしょう…あなたにもっと、
極上の絶望を
インストールしてやりますよ。

ほら、絶望したら…

しっかりちんぽを立てて、

このおまんこで

食い尽くしてあげますから、

しっかり堕ちてください。

(記憶を探るように)

ふふ…

ほら、思い出してください。

あなたがここに来た目的。

自分の大好きな恋人を救うために、

命がけでここに潜入したのですよね？

おや…？

ちよつとだけちんぽに

血流反応がありましたね。

少しだけ、彼女の面影を

思い出したのですか？

(核心に迫る)

ですが…

まだまだ解像度が足りません。

ほら…

初めに伝えましたよね？

私は女体をベースに作られた、

ハイブリッド型のアンドロイドだと…ふふ。

そうしたら、

ベースとなった「素体」の人間は

どのような人物だったのか…考えませんでしたか？

（反応を楽しむように）

ふふ、ほんの少しだけ

予感していたのではないですか？

ちんぽに明確な

勃起シグナルが出ました。

でも考えるのが嫌で、怖くて、

自分の脳みそで、

その最悪の可能性をデリートしていた。

ふふ…でも気づいてしまった。

これ以上にマゾが

気持ちよくなるシナリオはありませんね？

（濡れた秘部を押し付け）

（中・近）

ほら、おまんこ広げて、

半勃起ちんぽ、

先っぽをマン肉で…ゴシゴシしてあげます。

完全勃起したら、

奥まで食べてあげますからね。

ほら、私の匂い、私の質感、

私の声の波長……分かりますよね？

（残酷な真実を告げる）

私が生み出されたのは……

そう、あなたの恋人から。

あなたが感じていた声、

ぬくもり、快感も、
すべて彼女が

あなたに与えてあげたものなんです。
ふふ…分かりますよね？

（左・密着 さきやき）

私はあなたの恋人の身体を
解体・改造して作られた、
ハイブリッド型のアンドロイド…

つまり、あなたを攻めて、
弄んで、破壊してきたのは…

（決定的な一言）

あなたの

彼女自身だということですよ。

（中・近）

（ビクンッ！と跳ねたイチモツを握り）

あらあら、悪い悪の組織に、
自分の彼女を改造されて、
マゾ攻めされて調教されて…

その事実に興奮してマゾ勃起して、
情けないですね、最低ですね。

（一気に腰を下ろす）

ほら、

それではフル勃起した裏切りちんぽ、
おまんこに挿入、開始！

（ズツ、ズブズブズツ………！ ヌチュウツ！）

（内部の圧力を強めて）

ほらほら、ほらほら。

懐かしいですか？

それとも……悔しいですか

（激しく腰を打ち付ける）

自分の彼女の身体を

こんなふうに変造させられて、

生殖器を出し入れされて、腰を振られて、

それで悔しさと惨めさで

興奮してしまいますか？

ふふ、バイタルデータを見れば、

あなたの性器、どんどんどんどん

勃起率が高くなっているのが…丸わかりです。

（内壁をうねらせて締め上げる）

ほら、

しっかり味わってください！

我々悪の組織が……ふふ、

あなたの彼女の性器だけは、

しっかりと生体のまま

残してやってあるんですから。

もちろん……子宮もね！

アンドロイドで、

いつか優秀な生命を宿す

可能性があるから、

ここだけはしっかり、完全体で残してやりました。

あなたの粗末な情けないDNAでも、
射精さえできれば、

子を成すかもしれませんよ？

（精神を粉々に砕く）

（右・密着）

ふふ、悔しくて、惨めで、情けなくて、
怒りに震えていますね。

自分の彼女がこんな姿に改造されて、
ちんぽをおまんこに出し入れして、

ザーメンをポンプのように

絞り取ってくるなんて、

辛くて、苦しいのですか？ふふ。

（救いを否定する）

でも、全部嘘。

本当は、それで気持ちいいのですよね？

死んだはずの彼女と一つになって、

自分の人生も、彼女の尊厳も、

両方ともぶっ壊されて、躰けられて、

それで興奮して、

快感に溺れてしまっているんですよね。

最低の…

救いようのないゴミクズ人間。

（リストスパート）

でも、

それでいいのですよね。

ほら、私たち、

また一つになったんですから、

しっかりと最後までイキますよ？

あなたの最後の DNA、

しっかり私の子宮に届けてください？

（絶頂へ誘う）

（中・近）

ほーら、すべてを破壊され、

すべてを終わらされた変態マゾ。

その情けないイチモツから、

絶望の中出しをしてみてください。

ほら、

さーん。

（激しい水音と共に）

ほら、私のおまんこ、

どんどんビショ濡れになって、

あなたのイチモツを

掃除機のように吸い上げていますよ！

元恋人のパーツに

発射させられるという高揚感で

生体子宮がキュンキュン興奮して、

口を開けて待っています。

（容赦ない締め付け）

にーい。

ほら、腰をパンパン、パンパン振って、

ザーメンをおねだりしていますよ。

射精した瞬間にしっかりと、

アンドロイドの油圧式おまんこ握力で
全部精子を絞り取って、

ザーメン一滴残らず

子宮に吸い上げてやりますから！

しっかり果ててください？

あなたのすべてを私にください？

（左・密着）

いーち。

ほら、出る、

ほら、出る、

ほら、出る。

（絶叫に近い声で）

恋人のおまんこに

ザーメンビュルビュル本気射精。

アンドロイドになっちゃった

彼女のおまんこに、

大量の絶頂ザーメンを

叩きつけてください！

ほら、出る、ほら、出る、

ほら、中出し射精、キメろっ！！

（ドプツ！ドプドプドプツ！という大量の放出声）

（荒い息遣いと共に、さらに吸い尽くす音）

ああ……出てる、出てる……！

びゅーびゅーびゅーびゅーと

大量の雑魚ザーメンをひねり出して…

この世で一番情けない絶頂漏らし、

彼女の中で決めちゃいましたね……♡

（余韻に浸りながら）

（中・近）

ほら、

あなたの発情お漏らしで、

私のタンクが満たされました…ふふ。

（冷酷なトーンに戻り）

でも、

忘れないでください。

私はアークガーディアン、ネクロトリア03。

あなたをこの監獄で、

永遠に縛り付ける管理者です…ふふ。

（顔を近づけ、逃げ場を塞ぐ）

ほら、二度と離してやりませんから。

私の瞳に宿る…

あなたのことをね。

（中・密着）

ほら、誓いのキスをしながら…

んっ、ちゅ……っ

（キスフェラ 8秒）

（唇を離さず、深淵へ引きずり込むように）

（左・近）

逃がさない、逃がさない、

絶対逃がさない……

あなたのことを

ここから絶対に逃がしません…ふふっ。

(暗転するような重い声で)

一生、ここで朽ち果てるまで、
あなたのことを縛り付けて、
愛してやりますから。

(左・密着 ささやき)

だから、私からは、

死んでも逃げられませんよ。

……分かりましたか？